

社会認識を深め、生き方にせまる社会科教育の探究

～鴨川市の防災対策から考える身近な地域の学習～

1. 主題設定の理由

社会科学習において、生徒が主体的に生きていく力を育てるためには、単に社会的事象を表面的に理解するのではなく、社会的事象を構造的に把握しなければならない。科学的な社会認識を深め、自らの生き方にせまる社会科学習を構成し展開していくことが必要となる。

そこで、地域素材を取り入れた自主編成単元「鴨川市の防災対策から考える身近な地域の学習」の開発と実践を通して、「社会認識を深め、生き方にせまる社会科教育」のあり方を探りたいと考え、本主題を設定した。

2. 研究の目標

地域素材を取り入れた自主編成単元「鴨川市の防災対策から考える身近な地域の学習」における、「生徒の問題意識を大切にした指導計画の作成」と、「批判的思考（クリティカルシンキング）に基づいた多角的な検証」の、2つの手だてが、「社会認識を深め、生き方にせまる社会科学習」を構成する上で、有効な手だてであるかを明らかにする。

3. 研究の仮説

社会認識を深め、生き方にせまる社会科学習を構成するにあたり、仮説として次の2点を示す。

- (1) 地域の防災対策を教材化し、生徒の問題意識を大切にした指導計画を作成すれば、意欲的で主体的な学習となり、社会認識が深まるであろう。
- (2) 地域の防災対策について、批判的思考（クリティカルシンキング）に基づいた多角的な検証を行えば、自分の考えや価値観を問い直すことができ、新たな考えを持つことができるであろう。

4. 研究方法

地域素材を通して、「鴨川市の防災対策から考える身近な地域の学習」に関する事実を丹念に研究し教材化を試みた。そして、生徒の問題意識に応じた学習活動の展開を行った。

- (1) チームによる素材研究と素材の発掘
- (2) FWの利用
- (3) 地域人材の活用
- (4) クリティカルシンキングに基づいた検証
- (5) まとめ、発表

これらの学習活動を取り入れながら、社会認識を深め、自分自身の生き方を見つめる社会科教育の一教材化をめざす。

5. 結論

地域素材を取り入れて自主編成した学習において、生徒の問題意識を大切にした指導計画を作成したり、批判的思考（クリティカルシンキング）に基づいた多角的な検証により自分の考えや価値観を問い直したりすることができた。地域の学習をもとに日本、世界の事象について理解し、今後の自分の関わり方を考えることは、「社会認識を深め、生き方にせまる社会科学習」を達成する上で、有効な手だてである。

目 次

I. 研究主題設定の理由	1～2
1. 研究主題の設定理由	1
2. 社会認識を深め、生き方にせまるとは	1
3. 社会認識を深め、生き方にせまるための学習について	1
(1)教材研究の視点	1
(2)地域素材の教材化「地域社会に学ぶ」	1
(3)地域の今日的な課題を教材化する	1～2
(4)多様な価値に気づく話し合い学習	2
II. 研究の目標	2
III. 研究の仮説	2
IV. 研究の概要	2～9
1. 単元の位置づけ	2
2. 教材観	2～3
(1)なぜ地域素材を活用するのか	2
(2)鴨川市の過去の自然災害	2～3
(3)日本の災害対策の現状	3
(4)本素材の価値	3
3. 生徒の実態	3～4
4. 単元の目標	4
5. 指導計画	5
6. 授業分析	6～9
(1)関連図	6
(2)社会認識の考え方（深まり）と生徒の変容	7
(3)仮説の検証	8～9
V. 研究の総括	10
1. 結論	10
(1)結論	10
(2)課題	10
2. チーム研究について	10

I. 研究主題の設定理由

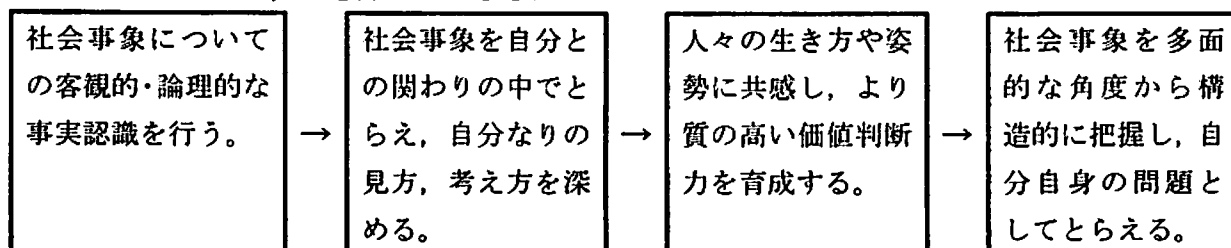
1. 社会認識を深め、生き方にせまることがなぜ必要なのか

現在の社会の急激な変化には、生徒はもとより大人すら対応ができなくなっている。情報化、国際化、高齢化、個性化が急速に進展し、産業構造も大きな変化を見せている。また、様々な価値観を受け入れなければならなくなっている。そのため、現代社会を生き抜くためには、現在の社会構造を正確に、また、その本質をとらえ、人や時代に流されることなく、自分で判断し、解決する能力が、今まさに必要になっている。

しかし、生徒たちを取り巻く状況はどうであろう。少子化、家庭生活での個別化、遊びの変化、情報化など、人間関係が希薄になり、社会生活への対応を不得手とする生徒が増加した。そのため、不登校やいじめ、凶悪犯罪などの社会問題を生じさせている。

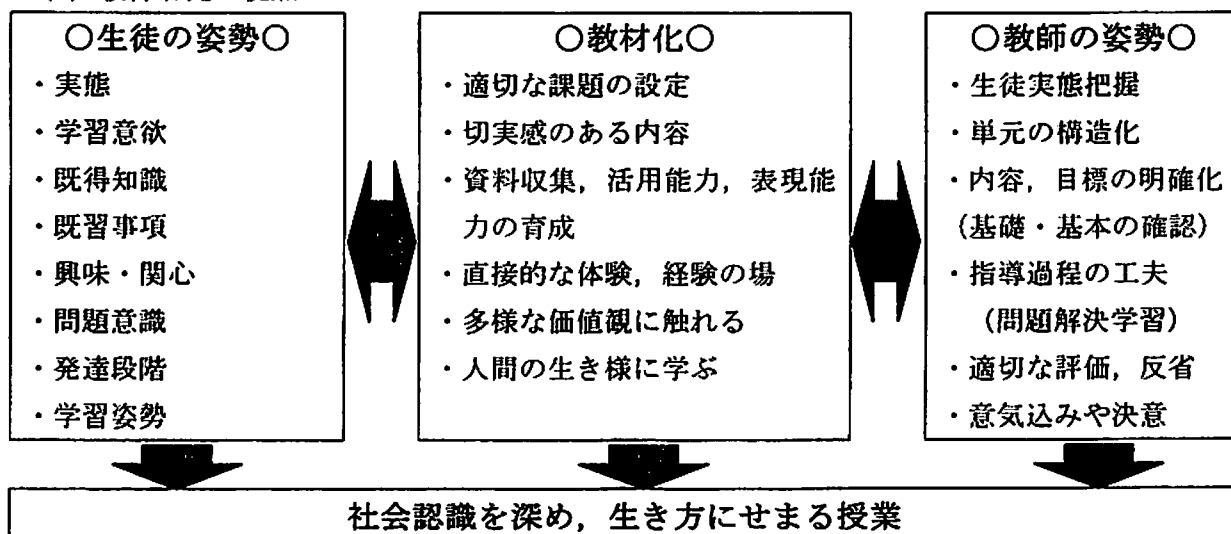
こうした生徒たちに必要なことは、現代社会の本質を、多面的・多角的にとらえることのできる認識力や価値判断力であり、その力を自分の生き方に投影できることである。

2. 社会認識を深め、生き方にせまるとは



3. 社会認識を深め、生き方にせまるための学習について

(1) 教材研究の視点



(2) 地域素材の教材化「地域社会に学ぶ」

「教室を飛び出し、地域社会に学ぶ」ことが必要である。複雑な社会構造を生徒に分かりやすく結びつけるためには、「地域社会から学ぶ」ことが必要である。身近な地域の調査などを通して、調べ、考えるためにも地域素材の教材化が効果的であると考えられる。

(3) 地域の今日的な課題を教材化する

今回の安房社会科教育研究会では、鴨川市の防災対策の教材化にとりくんだ。防災対策に従事する人たちの取り組みを、FWやGTを通して考える学習を進める。「この地域における防災対策はどのようなことが行われているのか」、「現在の課題はどんなことか」、「将来の展望はど

うなるか」を考えることが、生徒が地域を見つめる上で必要なことであると考えた。

(4) 多様な価値に気づく話し合い学習

授業の終末の場面では、FWやGTから得た知識を踏まえながら、生徒がそれぞれの考えをもとに発表をし、話し合いを持つ場面を取り入れる。そこで他者との交流の中で、新たな事実や異なる考えを知り、課題や解決策を多角的に考察することができると考えた。

Ⅱ. 研究の目標

地域素材を取り入れた自主編成単元「鴨川市の防災対策から考える身近な地域の学習」における、「生徒の問題意識を大切にしたい指導計画の作成」と、「批判的思考（クリティカルシンキング）に基づいた多角的な検証」の、二つの手だてが、「社会認識を深め、生き方にせまる社会科学学習」を構成する上で、有効であることを明らかにする。

Ⅲ. 研究の仮説

社会認識を深め、生き方にせまる社会科学学習を構成するため、仮説として次の二点を考えた。

① 地域の防災対策を教材化し、生徒の問題意識を大切にしたい指導計画を作成すれば、意欲的で主体的な学習となり、社会認識が深まるであろう。

② 地域の防災対策について、批判的思考（クリティカルシンキング）に基づいた多角的な検証を行えば、自分の考えや価値観を問い直すことができ、新たな考えを持つことができるであろう。

Ⅳ. 研究の概要

1. 単元の位置づけ

本単元は、学習指導要領の内容（2）日本の様々な地域ウ「日本の諸地域」において日本の自然環境の特色と自然災害による被害を少なくする努力について考えるに位置づけ「自然災害と防災への取り組み」の学習の中に発展的学習として、地域教材「鴨川市の自然災害と防災への取り組みの学習」として設定した。その過程で、身近な地域である鴨川市の自然災害や防災への取り組みを調べ、地域の自然災害に応じた防災対策が大切であることなどについて気づかせる。さらに、地域の防災対策の検証やそれに携わる人たちの取り組みを知り、社会認識を深めていく。つまり、日本の地域的特色を防災対策の面から追究し、理解するのである。

2. 教材観

(1) なぜ地域素材を活用するのか

身近な地域の素材を活用することにより、五つの効果が期待できると考える。

- ①具体的な事例で考えることができる。②自己の体験をもとに考えることができる。
③自らの手で、調べることができる。④学習の内容と自己のかかわりを考えることができる。
⑤人々の生き方について五感を通して感じるすることができる。

(2) 鴨川市の過去の自然災害

鴨川市は、1703年11月23日（旧暦で12月31日）の午前0時頃の元禄地震による被害を大きく受け、発生した午前3時頃に押し寄せた津波による被害が甚大であったと伝えられている。この元禄地震は、全国で死者10,367人を数えるとされているが、学区の前原地区では死者が1300人、1000世帯に及ぶ家屋が流失したと記録にある。今でも学区には日枝神社の津波避難丘、観音寺の大位牌、米倉稻荷神社の津波碑など、当時の被災を今日に伝える歴史的史跡

が残る。これらの神社・仏閣は生徒が生活する場の中に溶け込み、誰もがその存在を知っているが、元禄地震と結び付けている生徒はわずかである。地震や津波は想定範囲を超えて起こりうることは周知の事実であるが、実際に起こった元禄地震を取り上げることで、ただ津波や地震を恐れるだけでなく、過去の事例と照らし合わせ、ここまでは実際に起こりうる具体的な基準を持って防災対策を考えることができるだろう。

(3) 日本の災害対策の現状

日本は、地球全体を覆う十数枚のプレートのうちの4枚のプレートがひしめく場所に位置し、プレート境界やその周辺で発生する地震による被害を受けやすい地震列島である。実際、世界で発生するマグニチュード(M) 6以上の地震の2割近くが、日本の周辺で起きている。これまでも東日本大震災のようなプレートの沈み込みにより発生するプレート境界型の巨大地震やプレートの運動に起因する内陸域の地殻内地震(阪神・淡路大震災等)により甚大な被害を受けてきた。

1982.3.21	浦河沖地震	2003.7.26	宮城県北部地震
1993.1.15	釧路沖地震	2003.9.26	十勝沖地震
1994.10.4	北海道東方沖地震	2004.10.23	新潟県中越地震
1994.12.28	三陸はるか沖地震	2005.3.20	福岡県西方沖地震
1995.1.17	兵庫県南部地震	2005.8.16	宮城県沖地震
1997.5.13	鹿児島県薩摩地方地震	2007.3.25	能登半島地震
1998.9.3	岩手県内陸北部地震	2007.7.16	新潟県中越沖地震
2000.7.1	新島・神津島近海地震	2008.6.14	岩手・宮城内陸地震
2000.10.6	鳥取県西部地震	2008.7.24	岩手県沿岸北部地震
2001.3.24	芸予地震	2009.8.11	駿河湾地震
2003.5.26	宮城県沖地震	2011.3.11	東北地方太平洋沖地震

【日本の地震被害：環境省】

(4) 本素材の価値

本学習を通して、生徒は鴨川市の防災対策に携わる人々の取り組みを知ること、主体的に社会に関わろうとする意識や態度が身に付くであろう。そして、地域の一員として地域が抱える課題を広い視野から捉えることによって、課題解決の方策を考えさせることができる。

防災対策は、古くから日本人の生活に密接に結び付いており、時代が流れ、生活様式が変化した現在でも日本の課題である。そのような中で日本の防災対策や地域の防災対策を考察することにより広い視野で自然災害と人々の生活を捉えることができるであろう。

3. 生徒の実態 (1年1組 生徒数 35名)

1. 鴨川市で起きる自然災害には、どのようなものがあると思いますか。〔複数回答〕			
台風 28名 (80%)	洪水 12名 (34.3%)	落雷 16名 (45.7%)	竜巻 5名 (1.4%)
地震 33名 (94.3%)	津波 32名 (91.4%)	高潮 12名 (34.3%)	噴火 0名 (0%)
土砂崩れ 19名 (54.3%)			
2. 1の自然災害の中で、あなたが一番危険だと感じるものは何ですか。			
津波 31名 (88.6%)	地震 3名 (8.5%)	土砂崩れ 1名 (2.8%)	
3. 地震が起きた時、あなたの避難する基準を教えてください。			

強い揺れを感じたら 4名 (11.4%)	震度5以上 3名 (8.57%)
避難指示を受けたら 10名 (28.6%)	危険を感じたら 11名 (31.4%)
避難警報がでたら 6名 (17.1%)	その他 0名 (0%)

4. 家族で災害が起きた場合にどうするか、話をしたことがありますか。

ある (24名) ない (11名)

「ある」と答えた人はどのようなことについて話しましたか。

・避難場所、連絡先の確認 (24名)

5. 自宅で地震・津波の被害があった場合、避難する場所を決めていますか。

決めている (31名) 決めていない (4名)

6. 自宅で災害への備えや対策をしていますか。

している 17名 (48.5%) していない 18名 (51.4%)

「している」と答えた人は、どのようなことをしていますか。

・非常食や避難グッズを準備している 17名 (48.5%)

7. 鴨川市の防災マップ (ハザードマップ) を知っていますか。

知っている 6名 (17.1%) 知らない 29名 (76.3%)

8. 防災マップ (ハザードマップ) から、どんなことがわかりますか。

- ・津波が来た場合にどこまで逃げれば良いのか
- ・災害が起きた場合の避難場所について
- ・この地域は海拔何mなのか

9. 災害が起きた時に自分にできることは何がありますか。考えられることをすべて書きましょう。

・高いところや安全な場所へ避難する ・子供やお年寄りの避難を手助けする

10. 災害が起きた時にまわりの人と協力できることはどんなことがありますか。

・食べ物や飲み物を分けること ・安全な場所への案内をすること

アンケートの結果より、生徒は鴨川市において起こる可能性が高いであろうと考える災害は地震や津波であろうと考えている生徒が多いということが捉えられた。その中でも危険であると考えている災害が津波である。「海が近い」という点から、そのように考えているが防災マップについては知らない生徒が多い。防災マップの見方や記載されている情報等に関しても知らず、危険であると感じながらも実際に発生した場合にどのようにすれば良いのかに関して多くの生徒が無知である。そこで本学習を通じて、身近な地域の防災について考えさせていきたい。

4. 単元の目標

- (1) 地域の現状や課題、その解決方法について関心を持つとともに、意欲的に調べることができる。【関心・意欲・態度】
- (2) 防災対策に関するFWやGTとの共同学習を通して、地域の現状や課題について理解することができる。【知識・理解】
- (3) 防災対策に関わる人々の思い、願いに触れ、自分なりの考えを持ち、発表することができる。【思考・判断・表現】
- (4) 防災対策を取り巻く現状や課題、その解決策について、様々な文献資料や調査活動からまとめることができる。【技能】

指導計画 (全11時間扱い)

時	過程目標	学習活動と内容	生徒思考の流れ
1 ～ 2	自然災害にはどんなものが考えられ、その発生原因や対策にはどんなものがあるのかを調べ、まとめることができる。 ～見つめる【事実認識①】～	○自然災害について調べる。(台風・地震・津波・火山・大気汚染) 自然災害の発生原因や対策について調べよう。 ・災害ごとにグループ編成し、自然災害の発生原因や対策についてインターネットやHP、文献を利用して調査し、まとめる。 ・まとめたことをグループごとに発表し、互いに共有する。 【鶴川市で危険と考える災害】 地震災害・地震による津波災害	・たくさんの自然災害があることがわかった。 ・鶴川市で考えると一番身近な自然災害は地震や津波だろう。 ・対策をとっていたはずなのに東日本大震災では大きな被害が出た。
3	東日本大震災地域の被害状況や災害への対応を調査することで東日本大震災の被害について知ることができる。 ～見つめる【事実認識②】～ ～身近な地域への意識転換	○東日本大震災について調べ、被害状況について知る。 東日本大震災はどんな被害をもたらしたのだろうか。 ・被災地域や被害状況、災害後の対策や取り組みについてインターネットや文献をもとに調べる。＜岩手県釜石市と陸前高田市を中心に＞ ・震災時の映像や写真を見て、その当時の人々の様子や言葉を聞くことで被災した人々の思いに触れ、災害の深刻さを感じる。 →このような災害が鶴川市に起こってしまったらどうなるのだろうか。	・東日本大震災は、千年に一度のとてもおきな地震だった。 ・国や市が想定していた津波の高さを越える巨大な津波が押し寄せた。 ・鶴川市では東日本大震災のような地震被害、津波被害を受けたことがあるのだろうか。
4 ～ 5	東日本大震災での実際の被害状況を調査したことにより鶴川市においても過去にそのような災害による被害があったのかどうかを元禄地震を中心に調査することで現在の鶴川市に置き換えて考察することができる。 ～深める【追求①】～	○過去に鶴川市に被害を及ぼした災害について調査する。 ・HPや文献等を利用し、過去に鶴川市で起きた災害について調べ学習を行う。＜元禄地震による被害が大きかった＞ 元禄地震はどんな地震で、どれほどの被害をもたらしたのだろうか。 ○元禄地震についてFW調査を行う。FW先：鶴川市郷土資料館 ・鶴川市郷土資料館にFWを行い、鶴川市での地震や津波の被害を調査する。→元禄地震の他にも鶴川市に被害を及ぼした災害が多くある。 【FWでわかったこと・考察】 ・元禄地震により11月23日に起きた津波により田原地区で死者約1800人を出していた。現在の鶴川中学校地域まで津波の被害が及んでいた。 同じような津波が襲ってきた時に私たちは大丈夫なのだろうか。	・鶴川市にはどんな被害が及んだのだろうか。 ・鶴川市にも津波被害があった。現在の鶴川中まで被害が及んでいた。 ・鶴川市はどんな対策をとっているのか。 ・再び鶴川市にこのような地震が起きたときにはどうすれば良いのだろうか。 ・鶴川市でもいつか同じような津波が起きるのではないだろうか。
6 ～ 7	過去に鶴川市が災害によってどのような被害を受けたのかを知ったことで現在の鶴川市では災害に対してどのような対策がとられているのかを把握し、公助について追及することができる。 ～深める【公助の問題把握①】 【追求②】～	○鶴川市ではどのような防災対策が講じられているのかを調査する。 鶴川市ではどのような防災対策がとられているのだろうか。 ・鶴川市のHPを参考に現在の鶴川市で講じられている防災対策の現状について調査する。＜防災マップ・市合同避難訓練・貯蓄食料＞ ○鶴川市の防災対策についての詳細と防災マップの正しい見方についてGTからお話を聞く。GT：鶴川市役所消防防災課 【GTからのお話を受けて】 ・防災マップには避難指定場所、予想浸水区域、土砂崩れ危険区域などの情報が記載されている。津波の高さは10mを想定しているが、東日本大震災の時にように想定外の事態にはどうすればよいのだろうか。	・鶴川市防災マップがあり、そこには避難場所や予想被害区域が提示されている。 ・災害に備え、市合同避難訓練や市の貯蓄食料などが用意されている。 ・地震や津波、土砂災害など様々な災害に対しての備えがなされている。 ・鶴川市防災マップには災害に対する情報が載っているが、信用して良いのか。
8	東日本大震災地域の防災マップを震災前のものと震災後のものとを比較し、多面的・多角的に思考することができる。 ～深める【事実認識の転換】 【追求③】～	○東日本大震災前後の防災マップの比較を行う。【陸前高田市】 防災対策を越える被害にどのように対応すればよいのだろうか。 ・東日本大震災地域の防災マップの比較を行い、防災対策以上の被害がもたらされたことを捉え、現在とられている対策について多面的、多角的に考える。→予想をはるかに越える津波被害が及ぼされた。鶴川市でも今の防災対策以上の災害にはどう対応すればよいのだろうか。	・東日本大震災前後の陸前高田市（陸前高田地区）では、備えをはるかに越える被害がもたらされていた。 ・現在、鶴川市でとられている対策についても実際には対策を上回る被害が及ぶかもしれない。
9 ～ 11	身近な地域における災害時の避難場所や避難経路についての検証を行い、公助のものでの自助について考えることができる。また高齢者や体の不自由な方に対して私たちは何ができるだろうかという共助の意識を持つことができる。 ～わかる、広める【自助・共助意識の芽生え】～	○鶴川中学校における防災対策について検証する。 災害が発生した時にどのような備えや避難をするべきなのだろうか。 ・鶴川中学校における避難経路や避難場所の確認を行う。 ・徒歩、走り、自転車、車イス、高齢者、の避難時間を計測する。 ・高齢者や身体不自由者の体験を行う。GT：鶴川市社会福祉協議会 ○身近な地域における防災対策について検証する。 ・前時までの学習を活かし、自分の地区の防災マップの検証を行う。 →計測した避難時間をもとに自分の居住地域で災害が発生した場合にどの避難指定場所へ避難するべきか、また時間に余裕がある場合、更に安全な場所はどこなのかを考察する。 ・個人から地区別のまとめを行い、発表を行う。【地区別のグループ発表】 →鶴川市内でも地区に子どもが多い地域や高齢者が多い地域がある。共助の担い手となるためにまず公助のもと自助を大切にする。	・鶴川中学校では津波被害に対する第一次避難場所は校舎3Fで大津波警報時には男金神社。しかし男金神社までは徒歩15分かかるので間に合うのだろうか。 ・高齢者や身体不自由者は自分たちと同じようには避難することができない。 【生徒の考えの広まり】 ・共助をもとにして、まず自分の命を守る（自助）で人の命を救う手助けができる（共助）ので自分でできる対策を大切にする。

6. 授業分析 (1) 関連図 鴨川市の防災

＜鴨川市の概要＞

【自然条件】	【社会条件】	【歴史】
○位置：房総半島南部 ○気候：温暖（日照時間長い） ○面積：191.3 ㎢ ○地形：太平洋 磯浜海岸 海岸段丘 海食崖	○鴨川市（2006年3月合併） ○人口：33171人（2017年） ○総世帯数：14604世帯（2017年8月） ○観光産業 ○田畑の荒廃 ○観光資源 ○地産地消 ○地域産業の低迷 ○若年層の激減 ○第一次産業後継者不足 ○医療施設（亀田総合病院） ○各種スポーツ誘致 ○移住支援 ○町おこし、村おこし ○人口集中（沿岸部） ○労働力の地域外への流出 ○過疎化 ○少子高齢化・核家族化 ○若年層の人口流出 ○消滅可能性都市	○安房国（718年まで） ○花房藩（1871年まで） ○波の伊八 ○源頼朝 日蓮 ○自由民権運動

●鴨川市の地形から考える災害…地震、津波→【生徒の問題意識】

“自分たちの住んでいる地域の防災対策は、私たちの命を守れるのだろうか？”

防災マップの検証 （批判的思考に基づいた多角的な検証）

自 助 ・鴨川市の防災教室（家庭での対策、防災マップ） ・防災マップの共通理解 ・緊急避難所の決定 ・緊急持ち出し袋の準備 ・災害伝言ダイヤルの活用方法の理解 ↓ ・自分自身の備え 【自分で守る】	公 助 ・国や都道府県の行政、消防機関などによる救助、援助 【公共機関で守る】 ・平成26年 防災基本計画 ・平成28年 地域防災計画 ・消防防災課 起震車体験 - 鴨川市防災訓練および防災体験会（行政や消防との連携） ・鴨川市防災会 緊急避難場所、指定避難所、津波一時避難所の指定、避難施設の設定、周知 ・鴨川市安全・安心メール配信・緊急地震速報 ・市合同避難訓練の実施 ・防災マップ	学 校 ・避難訓練 ・備蓄品管理 ・安全点検 ・社会科学習（防災マップの見直し、防災の動き） ・福祉体験学習による避難範囲の把握 ・学校行事における防災派遣事業 ・防災指導資料の活用	歴 史 ・1703年12月31日 元禄地震（元禄関東地震） ・1923年9月1日 大正関東地震（関東大震災） ・2010年6月 鴨川市津波避難計画作成 ・2011年3月11日 東日本大震災 ・2014年3月 鴨川市防災マップ改訂	共 助 ・近隣住民同士の協力 【地域と助け合う】 ・地域コミュニティの再構築、充実 ・地域住民としての意識の変容 ☆「自助」→「公助」→「共助」という思考の流れ	中学生としてできること ・検証を生かした、避難計画の見直しと自己の避難計画の作成 ・地域貢献 ・日頃からの地域内への声掛け ・避難所での働き ↓ ・<u>社会の形成者としての自覚</u> ・<u>社会参画意識の向上</u>
---	---	--	---	---	---

市の防災の仕組みをとらえる

防災対策は、自助・公助・共助の考えのもとに成り立っている

2・3年次の学習

・社会の形成者としての自覚（公民的資質の基礎） ・社会参画意識の向上（自分たちのできることを考える）

社会との関わりを意識した問題解決的な学習

(2) 社会認識の考え方(深まり)と生徒の変容

社会認識の考え方 (深まり)	生徒の認識の深まり	生徒の認識の深まり			
		生徒 A	生徒 B	生徒 C	生徒 D
浅層(浅い) 中層(深い) 深層(核心)	見つける(事実認識)	第1時～第2時 自然災害について調査する。(問題把握・予想)			
		・鴨川で津波が発生したら恐ろしい。 ・海に近い鴨川市で津波が襲ってきた時どこに避難すればよいのだろう。	・もしもの自然災害に対して避難場所の確認や防災グッズの用意をしなければならない。 ・鴨川市の防災マップにはどんなことが記載されているのだろうか。	・出来るだけ多くの人の命が助かるようにもっと学びたいし、その知識を市の方々に広めたい。 ・もっと詳しく調査しなければならない。	・今のままでいいのだろうか。 ・自分の命を守るためには、どうすればよいのだろうか。 ・自分の身になるだけではなく、他の人のためにもなれるようにしたい。
	深める①(事実認識)	第3時 F Wを通して鴨川市で起きた災害について理解を深める。(問題追究①②③・分析)			
		・過去に何度も地震による津波被害を受けてきた地域であるにも関わらず、予想を超える被害を受けてしまった。 ・言い伝えは残されていたが本当の怖さを理解していなかった。	・過去の経験を活かし、対策をとっていたが「想定外」への対応ができなかった。 ・防災マップに予想されていた津波被害の大きさをはるかに上回る被害が実際に起きてしまった。	・避難訓練や対策を行っていたが、人々の中に「大丈夫だろう」という考えがあった。 ・釜石市の中学生は地域の方や小学生をより安全な場所へと誘導し、多くの人の命を救った。	・高齢者や小さな子ども達は逃げ遅れてしまい命を落としてしまった。 ・釜石市の小学校では校舎3階へ避難を考えていたが、実際には校舎3階に車が突っ込むほどの大きさだった。
	深める②(関係認識)	第4時～第5時 元禄地震が鴨川市に及ぼした被害について理解を深める。(問題追究①②③・分析)			
		・過去に起きたような津波(最大7m)が鴨川市を襲ったら、鴨川中学校は大丈夫なのか。 ・自分が自宅にいるときに災害が起きたら自分にできることは何だろうか	・自分の自宅付近も過去の津波で大きな被害を受けていることがわかった。死者が1300人を超えたことを知り、驚いたとともに不安になった。 ・防災マップは津波最大10mを想定であるが大丈夫なのか。	・鴨川市でも過去にいくつもの地震災害や津波災害を受けていたことが分かった。 ・災害が起きた場合にはまず一人一人が自分の命は自分で守るための行動が大切である。	・中学校の津波想定での避難訓練は校舎の3階に避難しているが、本当に大丈夫だろうか。 ・災害が起きた時に私たちが出来ることは何だろうか。
深める③(関係認識)	◎消防防災課のG Tの講話から現在の鴨川市における災害への対策について事実を知る。	第6時～第7時 鴨川市における災害への取り組みを知り、公助への理解を深める。			
		・私の家には足の不自由な祖父がいるので、避難の仕方を家族で考えないといけない。 ・この授業を終えて家族で避難場所について話し合った。 ・防災マップには浸水区域や指定避難場所などが記載されていることが分かった。	・鴨川市の防災マップは本当に安全なのだろうか。 ・鴨川市にも防災マップがあり、どこが危険なのかがわかって少し安心した。しかし、想定した津波は10mなので、15mや20mの津波がきたらどうなるだろう。	・鴨川は地形的に津波が来ることはなく、元禄地震の津波が最大で、中学校の3階に避難することが安全だと言われた。しかし東日本大震災では、津波避難ビルである学校の屋上に避難した人が被害にあっている映像を見たので不安が残る。	・「共助」という言葉が印象に残った。 ・自分の命を守ることに加え、支え合うことが大切だと思う。 ・助けられる側から助ける側になれるようにしたい。
深める④(深層認識)	◎東日本大震災地域の防災マップと鴨川市の防災マップの比較を行い、考察する。	第8時 東日本大震災地域の震災前後の防災マップを比較する。(洞察・問題解決・発展)			
		・東日本大震災地域の防災マップと鴨川市の防災マップでは浸水区域や想定される津波の高さに違いが見られる。 ・鴨川市の防災マップを使い自分の居住地区における避難場所や最短での避難場所が分かった。	・鴨川市の防災マップは10mの津波を想定しているが、東日本大震災では10m以上の津波が襲ってきている。鴨川市でそのような大きさの津波が発生した場合にはどうすればよいのか。	・自分の自宅から一番早く避難できる避難場所が分かった。 ・子どもや高齢者の方々に配慮された防災マップではない。同じ条件で避難できない中で、自分たちに何ができるのだろうか。	・私の居住地区には保育園施設がある。小さな子供の命を救うために施設の方々はどのような避難を考えているのだろうか。
広める(深層認識)	◎社会福祉協議会のG Tによる福祉体験から高齢者や身体不自由者の疑似体験を行い、考察する。	第9時～第11時 身近な地域での災害について考察する。(洞察・問題解決・発展)			
	◎身近な地域における災害時の避難場所や避難経路についての検証を行い、公助のもとでの自助を考えるとともに共助の担い手として自分自身に何ができるかを考察する。	・大変さや困難さが分かった。 ・車いすや高齢者の方が困っていたら声をかけてあげられるようにしたい。 ・自力で避難することが難しいので私たちが力を貸さなければならない。 ・避難が難しい人を少しでも自分の力で手助けしたい。 ・「自分たちの町は自分たちで守る」鴨川市は平均的に見て、高齢者の数が多いのでお年寄りの誘導や声掛けを大切にしていきたい。	・自分たちの命を守りながら、高齢者の方を手助けすることが大切である。 ・身内の人を助けられればいいと思っていたが、考えが変わった。 ・鴨川市の防災マップを見ると自宅にいるときは、津波の心配がないことがわかった。しかし、土砂崩れの心配があることがわかってきた。防災マップの検証を通して、今まではなかった情報が読み取れるようになってきたので、今後の生活に活かしていきたい。	・歩行や視野の範囲も高齢者の方は私たちと違い、それを体験して怖さを感じた。高齢者や身体不自由者の大変さを感じた。 ・中学校での津波想定避難訓練は、男金神社が避難場所だが、車椅子や怪我をしている人は、津波到達予想の10分での避難が厳しい。 ・今まで鴨川市の方たちが様々な災害対策を行ってくれていたが、車椅子や自転車での避難するケースが想定されていなかったもので、防災マップに書き加えた。今回の学習を活かし共助の手助けをしたい。	・一人ではできないことを抱えている人がいるので、私たちのような健康者が支えなければいけない。 ・自助を行うのは当たり前で、共助に力貸せるように行動しなければならない。 ・足の不自由なお年寄りの場合、避難できてもわずかな距離しか逃げられない。もし近くに困っている人がいたらどうやって手を貸してあげたらいいのか考えてしまった。 ・お年寄りや、体の不自由な人を助けるためにも、まずは自分の命を守るようにする。

- ① 地域の防災対策を教材化し、生徒の問題意識を大切にした指導計画を作成すれば、意欲的で主体的な学習となり、社会認識が深まるであろう。

【生徒の感想】

単元の始めに「鴨川市で起こりそうな自然災害は？」と問いかけると、一番多いのが「地震」その次が「津波」で、津波に関しては、一番危険だと答えている生徒が多くいた。東日本大震災で、危険箇所の地理的特徴を捉えている生徒もいた。しかし、過去の鴨川市の津波被害に関しては知らない生徒が多かった。そこで、事実認識の場面では、鴨川市郷土資料館にFWに行った。資料1のように、現在、自分が生活する中学校、そして有事の際にどうすれば良いのかという疑問や不安を感じる生徒が大半であった。

事実認識・関係認識の場面では、市の消防防災課の方を招き、鴨川市の防災マップをもとに、防災対策について話を伺った。資料2のように、「東日本大震災では、屋上に避難した人たちが被害にあっている。避難先の変更が必要では」「足が不自由な祖父のために、避難の仕方を考えないといけない」など、既存の防災マップに対する生徒たちの新しい不安が見られた。

次の事実認識・関係認識②では、東日本大震災地域と鴨川市の防災マップの比較を行った。資料3のように「健常者を想定とした防災マップのみでいいのか」という疑問や「他地域の防災マップには矢印などを使い、避難方向がわかりやすいものがある」など、既存の防災マップをどうしたら更に役立てることができるかという考えを持ち始める生徒が出てきた。

資料4では、生徒の抱いた疑問を解決するために社会福祉協議会の方を招き、高齢者疑似体験を行った。この体験を通して、高齢者や肢体不自由者の立場などを含めて、防災マップが多くの人にとって有用であるべきだという思考に至った生徒が出てきた。

深層認識の場面では、防災マップに生徒が考察した新たな情報を加える作業を行った。資料5のように、「避難方法によって避難範囲が見やすくなった」「津波はないが土砂崩れの危険性がある」など新たな考察をする生徒も出てきた。

最後の場面では、これまでの学習から市の防災の仕組みをとらえ、さらに防災マップを再検証し、様々な立場の人の避難経路や方法、不測の事態への対応を考えるようになった。今回の学習によって、生徒が広い視野に立って防災に関して社会認識を深めることができたと考ええる。

以上のことから仮説が有効であるといえる。

資料1 FWを通じて、鴨川市の過去の災害について の事実を捉える ～事実認識～

- ・過去に起きたような津波（最大7m）が鴨川市を襲ったら、鴨川中学校は大丈夫なのか。
- ・同じような津波が、今起きたら何をしたらいいか、どこに逃げたらいいかわからなくて怖くなった。

資料2 GTの話から分かったことを確認し合う ～事実認識・関係認識～

- ・鴨川は地形的に大きな津波が来ることはなく、中学校の3階避難が安全だと言われた。しかし、東日本大震災では、津波避難ビルである、学校の屋上に避難した人たちが被害にあっている映像を見たので、避難先が違ふ方がいいのではないかと。
- ・避難先について家庭でも話し合うことができた。私の家には足の不自由な祖父がいるので、避難の仕方を考えないといけないと思った。

資料3 東日本大震災地域の防災マップと鴨川市の 防災マップの比較をする

～事実認識・関係認識～

- ・防災マップの避難スピードは健常者のみのもので、体の不自由な人にとっては、見づらいのではないかと思った。
- ・津波が10m想定で、地理的特徴を見ても10m以上のものは来ないと言っていたが想定外を考える必要があると思う。
- ・東北の防災マップは避難方向を示す矢印が多くあり、ここにいたらどこに逃げるのかがわかりやすかった。

資料4 GTとの共同学習（高齢者疑似体験）を通し て分かったことを確認し合う

～事実認識・関係認識～

- ・足の不自由なお年寄りの場合、避難できてもわずかな距離しか逃げられない。もし近くに困っている人がいたらどうやって手を貸してあげたらいいのか考えるようになった。
- ・防災マップ上での避難距離の想定が高齢者用になっていないので、歩きと走り以外で避難する場合も考えた方がいいと思った。

資料5 既存の防災マップに自分たちが知りえた情報 （300m避難するのに必要な時間）を加えて、 さらに便利にする ～関係認識・深層認識～

- ・避難指定ビルに行く途中に川があるので、別のビルに避難したほうが安全だとわかった。
- ・車椅子での避難の場合は自力では4分かかる、おんぶでの場合は5分もかかってしまうので、避難できる範囲がとても狭いことがわかった。
- ・自宅付近には津波がこないことがわかったが、土砂崩れの危険性があることが新たにわかった。

資料6 まとめ（自分たちの住んでいる地域に大きな 災害が起きたらどうするか）～深層認識～

- ・より安全な避難先がわかったので、まずは自分の命をしっかりと守る。それから近くに人たちに声かけや誘導をしていきたい。緊急事態では避難所でも自分のできることを率先して行っていきたい。
- ・学校の避難先を変える。1500m先の避難先なら、地形的にも坂がなく避難しやすい西条方面にした方がよい。
- ・市の方たちが様々な災害対策を行ってくれていたが、車椅子や自転車での避難するケースを想定することで、もっとたくさんの人たちにとって使いやすいくにしていける必要がある。

②地域の防災対策について、批判的思考（クリティカルシンキング）に基づいた多角的な検証を行えば、自分の考えや価値観を問い直すことができ、新たな考えを持つことができるであろう。

【生徒の感想】

地域の防災対策について学ぶにあたり、東日本大震災が起きる前と起きた後で変化した防災マップを見せた。資料1にあるように、「安全だと言われていたところまで津波が来てしまったので、怖いと思った。」「防災マップを信用していいのかという不安がとて大きくなった。」など、既存の防災マップに対しての不安が出てきたことによって、鴨川市の防災マップをしっかりと見てみたいと思う生徒が出てきた。

そのため、鴨川市の消防防災課の方をGTに招き、鴨川市の防災マップについての説明をしてもらった。資料2にあるように、「東日本大震災では、屋上に避難した人たちが被害にあっているのを見て不安が残る。」「想定外の大きさの津波が来たらどうするのか。」など、既存の防災マップに対する不安や疑問を感じる生徒が出てきた。さらには、「鴨川には高齢者が多いので、その人たちが使いやすいものにしていく必要があるのでは。」と述べた生徒の意見に対して、たくさんの生徒が賛同した。

多角的に防災マップを検証するために、社会福祉協議会の方をGTに招き、高齢者疑似体験を行った。資料3には、「車椅子やおんぶで避難している人は津波到着予想の10分では避難できない。」「歩きと走り以外で避難する場合も記入した方がいいと思った。」など、疑似体験を通して、立場によって防災マップが見づらなものになっていることに気付く生徒がでてきた。

また資料4にあるように、既存の情報（防災マップ）を自分たちで検証し、新たな情報としてまとめる作業を行った。「5分で避難できる範囲をコンパスでひくととても見やすくなった。」「一番近い避難指定ビルに行く途中で川があるので、別のビルに避難したほうが安全。」だという新たな視点で防災マップを捉えられる生徒がでてきた。

まとめの時間では、地域の防災対策について自分たちが出来ることについて話し合った。資料5の「学校の避難先の変更をした方がよいのではないかと教頭先生に提案してみる。」や「津波被害以外の情報が読み取れるようになった。」など検証によって新たな見方、考え方に至る生徒が出てきた。さらに「防災マップを検証することで、もっと使いやすいものにすることができた。消防防災課に提案したい。」など、地域の防災対策への今後の関わり方を考える生徒も出てきたことから、仮説②が有効であるといえる。

資料1 東日本大震災前と後の防災マップの変化を見て

- ・ここまでは津波は来ないので安全だと言われていたところまで津波が来てしまったので、怖いと思った。
- ・市が作ってくれている防災マップを信用していいのかという不安がとて大きくなった。
- ・震災前と震災後で防災マップが変化していた。鴨川市の防災マップとはどんな違いがあるのか調べたくなった。

資料2 GT（消防防災課）の方の話を

防災マップの説明を聞いての感想

- ・鴨川は地形的に大きな津波は来ないし、元禄地震の津波が最大。中学校の3階に避難することが安全だと言われた。しかし、東日本大震災では、学校の屋上に避難した人たちが被害にあっている映像を見たので、不安が残る。
- ・防災マップには避難距離が書いてあった。私の家には足の不自由な祖父がいるので、本当にその速さで避難できるのか不安に思った。鴨川には高齢者が多いので、その人たちが使いやすいものにしていく必要がある。
- ・鴨川市にも防災マップがあり、危ない場所がわかって少し安心した。しかし、津波想定高は1.0mなので、1.5mや2.0mの津波がきたらどうなるのだろうか。

資料3 GTと的高齢者疑似体験での感想

- ・中学校での津波想定避難訓練は、男金神社が避難場所だが、車椅子やおんぶで避難する人は、津波到達予想の10分での避難が難しい。
- ・足の不自由なお年寄りの場合、避難距離がとて少ない。もし近くに困っている人がいたらどうやって手を貸してあげたらいいのか考えてしまった。
- ・防災マップ上での避難距離の想定が高齢者用になっているので、歩きと走り以外で避難する場合も記入しておいた方がいいと思った。

資料4 防災マップに知っていた情報（5分で避難できる距離）を加え、さらに便利にする

- ・津波到達の時間が10分で想定されているので、5分で避難できる範囲をコンパスでひくととても見やすくなった。
- ・車椅子での避難の場合は自力では4分かかる、おんぶの場合は5分かかってしまうので、避難できる範囲がとて狭いことがわかった。
- ・一番近い避難指定ビルに行く途中で川があるので、別のビルに避難したほうが安全だとわかった。

資料5 まとめ（話し合い）

- ・学校での津波想定避難訓練は、1500m先の避難先になっているが、同じ1500mなら、西条方面に避難する方が地形的にも坂がなく避難しやすいし、海から遠ざかるという点でも優れているのではということをおもて先生に伝えよう。
- ・今ある防災マップを自分たちで検証することはとても大切。津波被害以外の土砂災害の危険性があることなどが見えてきた。とても大切な作業だと思った。
- ・今まで鴨川市の方たちが様々な防災対策を行ってくれていたが、車椅子や自転車での避難するケースなど、様々な避難想定がされていなかった。避難方法別の距離を防災マップに書き込むことで、もっとたくさんの人にとって使いやすいものにしていくことができることを今回の授業で学んだ。今後、情報をもっと見やすいものにしていき、消防防災課の人に提案できるようにしたい。

V. 研究の総括

1. 結論

(1) 成果

生徒の問題意識を大切にした指導計画の作成や、FWやGTとの学習によって、地域の防災対策に携わる人々の生き方にふれたりすることで、より深く地域の防災について理解し、今後の自分の関わり方を考え、「社会認識を深め、生き方にせまる社会科学習」を達成する上で、有効な手だてである。

(2) 課題

地域学習を取り入れる場合は、FWを通して、そこに携わる人々への調査活動が大切である。しかし、日程調整やGTとの連携に関して、現在の学校事情を考えると難しい問題が山積している。また、調べたことをまとめ、発表する学習も多く時間を費やす。生徒に本物の授業を提供しようと考え、手間暇をかけたとりくみが必要になってきている。しかし、学習指導要領の改訂に伴う指導内容の増加、支部教研の日程もあり、年度末処理の多忙の中で研究を行っていかねばならないため、授業内容を精選し、計画的な学習過程を構築する必要がある。

そして、今後の安房社会科教育研究会の大きな課題として、過疎化が進んでいる地域に暮らしていく中で、社会参画意識を生徒にどう持たせるか、というものがある。生徒と我々が目指す社会参画とはどのようなものかを考えなければならない。社会認識を深めていくことによってどのように社会とのかかわりを持たせるか。これから考えていかねばならない毎年課題である。

2. チーム研究について

39年の長きにわたる安房社会科教育研究会中社チームの特色は、研究員及び生徒の問題意識を大切にしたフィールドワークを通して、研究に関わる資料を収集し、それを教材化して活用してきたことである。3月21日鴨川市立鴨川中学校で行われた授業研究会では、この特色があらわれた授業が展開された。生徒数は35名。本授業の中心的な発問である「自分の住んでいる地域に大きな災害が起きたらどうすればよいのか。」という課題で学習が始まった。

野球部の顧問であり、グラウンドで毎日生徒とともに汗を流す伊藤先生のさわやかかつ張りのある声に生徒は引き込まれていった。生徒はFWやGTとの学習を通して得た知識や今まで学習したことをもとに積極的に意見を述べ、学習問題に対して発言していった。生徒の発表内容は、学習に裏打ちされた内容で、今までの学習がとても生きている内容であった。

今年度のチーム研究は昨年の10月の第1回研究会から10数回を数えた。一番頭を悩ませたのは、「この教材を通して、生徒に何を学ばせるのか？」という中心概念である。なかなか方向性が定まらないまま研究会を行う中で、増えてきた若い先生方とベテランの先生方とが積極的に意見を交わしあった。そして夜遅くまで話し合いをし、研究の手法等を含め、事細かに研修を行った。生徒数の減少から社会科担当が各校に一人という先生方が多い中、このような時が、安房社会科教育研究会におけるチーム研究の継続性が再認識される場面である。

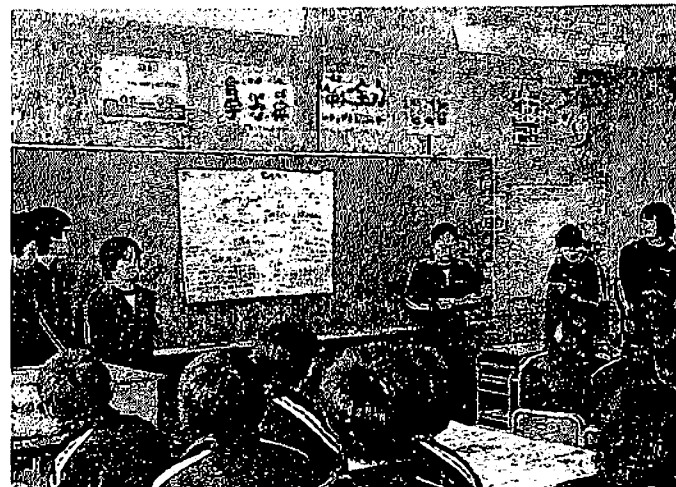
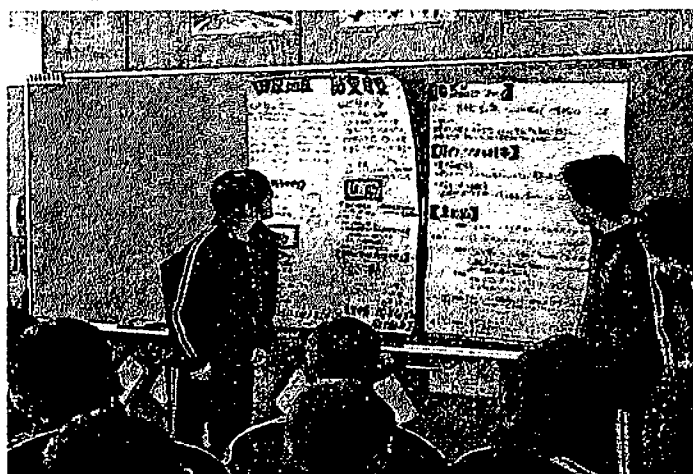
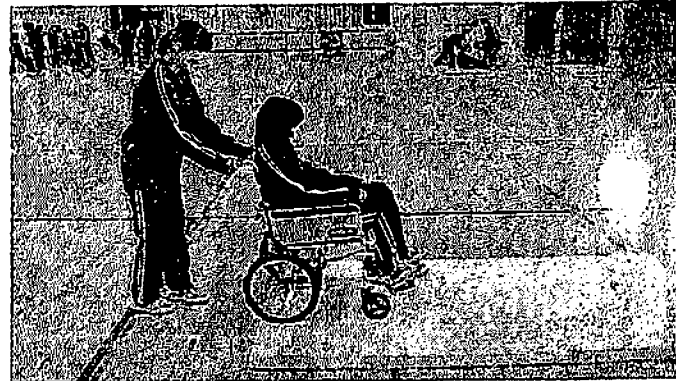
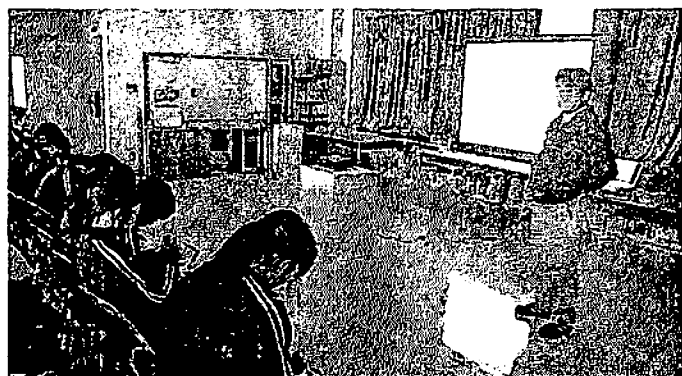
最後に、忙しい合間をぬって研修に参加していただいたチームの研究員、諸先輩方に感謝の言葉を贈りたい。

社会認識を深め，生き方にせまる

社会科教育の探究

～鴨川市の防災対策から考える身近な地域の学習～

資料編



目 次

I. 鴨川市の概要	1
II. 教材化への留意点	2
1. 「地域素材の教材化」とは	
2. 地域素材を教材化する場合の学習計画の構想	
III. 本時の指導	3
IV. 授業記録	4～8
V. 授業の実際	9～13
参考文献・参考資料	15
取材協力	15
研究組織	15

1. 鴨川市の概要

(1) 鴨川市の現況

鴨川市は房総半島南東部、太平洋岸に面しており、約31kmの海岸線を持つ。県庁所在地の千葉市からは約70km、東京から約85kmに位置している。1971年に鴨川町、江見町、長狭町が合併し鴨川市を新設。さらに2005年に天津小湊町と合併し現在の鴨川市となる。2016年の年間平均気温16.7℃という温暖な気候であり、古代から農業、漁業の盛んな地域であった。

2017年6月現在は人口33,253人、世帯数14,633世帯となっている。合併した2005年に比べて人口は約4万人減少しているのに対し、世帯数はほぼ同数と、核家族化が進行している様子がうかがえる。

土地利用では全体の15%を水田と畑が占め、農業の盛んな土地柄である。また、天津地区をはじめとして全体で漁業が盛んな地域であり、2015年の産業別人口割合では第一次産業は約11%を占め、全国平均を大きく上回っている。特に農業では米や花卉の生産量、漁業ではぶりやいわしの漁獲量が多い。しかし近年は後継者不足に悩まされており、第一次産業の人口及び農業生産量、漁獲量の減少が続いている。一方で多くの観光地、観光施設を抱えていることもあり、第三次産業の割合は年々増加傾向にある。

広い市域の中央部に当たる鴨川地区はかつて農業と漁業の町として発展し、周辺地域の物資の集積地として商業も発達していた。現在は観光地や市街地が集中しており、地区内を走る国道128号線は非常に交通量が多い。鴨川市の東部の天津小湊地区は丘陵地帯が広がっており、日蓮が出家した清澄寺や日蓮の生家跡に弟子が建立した誕生寺などの名所を抱えている。南部の江見地区は新日本百景の1つで源頼朝や日蓮にゆかりのある仁右衛門島などの観光地を持ち、観光と花卉栽培が盛んな地区として知られている。長狭地区は沖積平野である長狭平野が広がり、古代から米作りが発達していた。また、嶺岡山には戦国大名里見氏が馬を飼育する牧場を建設し、江戸時代には乳牛の飼育が行われるようになったことから、日本の酪農発祥の地とも言われる。大山千枚田など、農業に関係した観光地が多いことも特徴である。

温暖な気候と首都圏に近い立地、観光をはじめとした様々な産業を生かした「魅力ある鴨川」づくりのための取り組みが進められている。

(2) 鴨川市の防災

鴨川市の直下には鴨川低地断層帯があり、2000年までの調査では、現在活動していない可能性が高いが、今後も継続して調査が必要とされた。活断層だった場合、将来的にマグニチュード7.2程度の直下型地震が発生する可能性があると言われている。また元禄地震(1703年)や関東大震災(1923年)などの海溝型地震の被害を受けてきた地域でもあり、市は鴨川市防災会議を中心に、防災に対して非常に力を入れて取り組んでいる。市のホームページでは防災に関する情報が多数公開されており、市の防災対策の他に、非常用持ち出し品の紹介やいざというときの応急処置の方法などを見ることができる。

元禄地震においては10m近い津波が房総半島南部を襲ったと考えられていることもあり、市は「鴨川市津波避難計画」や防災マップを作成して地震や津波の対策を行っていた。その後2011年の東日本大震災をきっかけに、同年「鴨川市津波避難計画」の改訂を行った。これは市民の迅速な避難行動を支援するためのもので、避難方法や避難場所の他、市からの情報伝達の手段などを定め、公表している。また、鴨川市は南が太平洋に面し、北東から南西にかけて山間部が広がるという、降雨や暴風の被害を受けやすい地理的条件である。特に台風通過時には過去に浸水などの被害が多発した。そのため強風や土砂崩れ、河川の氾濫などの対策も必要である。2014年には様々な大規模災害が発生することを想定し、それまであった防災マップの改訂を行っている。さらに2016年に「地域防災計画」を作成した。これは地震・津波、風水被害、大規模事故それぞれに対して、災害予防対策、災害応急対策、災害復旧・復興対策についてまとめられている。房総半島の南東に位置し、国や県の対応が遅れる可能性を考慮して、市内の防災関連機関、鴨川市民および事業所が協力し、災害に対応することを定めているのが特徴である。なお、この防災計画は毎年内容の見直しを行うことになっている。2017年には「鴨川市津波避難計画」が改訂されるなど、市民の生命と財産を守るための取り組みを継続的に進めている。

Ⅱ. 教材化への留意点

1. 「地域素材の教材化」とは

(1) 地域概念

『「何らかの特質性を持った一定の範囲の土地、生活圏を指している。」つまり、人間がその土地に長い年月住みつくことによって知らず知らずのうちに形成されたのが「地域」であるから、そこには人間の生活が色濃くにじんでいる。』（『社会科の課題と授業づくり』）

↓

いわゆる、地域に根ざすとは「生活に根ざす」ことである。

(2) 地域素材がもたらす生徒への有効性

①感じたこと（感情・心情）をそのままぶつける。（生徒にとっての入りやすさ）

↓ 【調べ学習】

②教材の中に入り込んでくる。身を乗り出してくる。（意欲的な学習）

↓ 【FW・調べ学習・発表】

③人ごとでなく、切実な問題として考え始める。（教材の主體的な受け止め）

【GTとの学習会・討論会】

安房社会科教育研究会の授業実践の柱はFWである。生徒が獲得していく社会認識は、そのまま生徒にぶつけるには難しいことがある。しかし、聞き取り調査・現地調査・実体験などの生きた学習は、生徒の問題意識を高め、社会認識を深めるのに大変効果がある。問題意識が高まり、切実感を持てば、生徒は自ら学習に集中していく。私たちが生活している地域社会には、教材となる魅力的な素材があふれている。

2. 地域素材を教材化する場合の学習計画の構想（生徒の社会認識を深めるための計画）

生徒の学習意欲を喚起するものは、切実感と問題意識であると考ええる。

生徒が今まで獲得した知識や経験の枠組みに新しい事実や経験を取り入れることによって、今までの価値観の見直しがせまれる。

このように、生徒が出会った問題を主體的に追究させることによって生徒の認識やそれを支える内面的思考を変容させていくことが必要である。

生徒の切実感：この問題は確かに自分にも関係がある。

【見つめる】 鴨川市の防災対策への関心を高める。

問題の把握 → 鴨川市の防災対策の現状理解と課題把握
(事実認識) <課題との出会い> → 学ぶ意欲の喚起

【深める】 鴨川市の防災対策の現状と課題を理解する。

問題の追究 → 防災対策に関わる諸機関へのFW
<社会との出会い> → 学ぶ意欲の育成

問題の整理 → FWの発表会・新たな疑問の発見
(関係認識) <新たな疑問との出会い> → 学びの連続

【わかる】 防災対策と今後の自分の関わり方について考える。

問題の理解 → GTとの学習会
(深層認識) <大人との出会い> → 学びの深化
鴨川市の防災対策について理解し、今後の自分の関わり方を考える
<本質との出会い> → 学びの確立

Ⅲ. 本時の指導 (11/11)

(1) 目標

○G Tとの関わりやFWを通じて地域の防災対策について再認識し、地域住民の一員として今後どのように地元社会と関わっていくかについて考えることができる。

【思考・判断・表現】

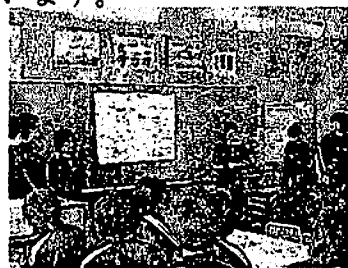
○防災対策に関するFWやG Tとの共同学習を通して、地域の現状や課題について理解することができる。

【知識・理解】

(2) 展開

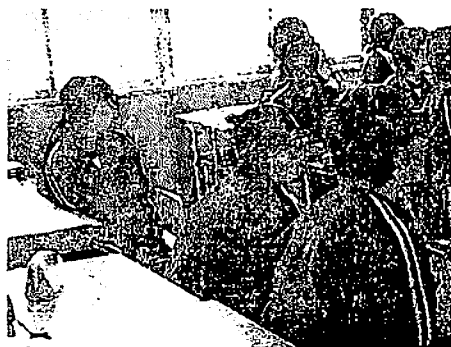
過程目標	学習内容と活動	支援(・)と評価(○)
本時の学習課題をつかむことができる。(5)	1. これまでの学習を振り返り、本時の学習課題を理解する。	・鴨川市の防災対策の現状の確認を行う。
地域の防災対策を学習し、自分たちにできることは何だろう？		
進んで発表したり意見を述べたりしながら本時の学習課題を追求することができる。(30)	2. これまで学習したことをもとに発表を行う。 ・グループ内での役割分担の確認 ・発表 ・他の地区における防災対策において自分たちができることについて質問や意見を述べる。 1班「鴨川地区」 2班「東条地区」 3班「田原地区」 4班「西条地区」 5班「江見・太海・曾呂地区」 6班「天津小湊地区」	○調べたことや資料をもとに進んで発表ができる。 ・命を救う(救助の面)へ思考が向いてしまうことのないように配慮する。 ・机間指導により積極的な発表をうながす。
単元のまとめをすることができる。(15)	3. 今までの授業を通して感じたことを作文にまとめる。 ・自分の考えがどのように変わっていったか。 ・今後、地元社会に自分ができることは何か。 ・中学生として何ができるか。	○地域の現状や課題について理解することができたか。 ・まず自分の命を守ることを最優先にすることを助言する。

	授業記録 於：鴨川中学校
T : 司会 鴨川班	じゃあ今日は、今まで調べてきた内容を発表してもらいます。 それでは鴨川地区班は発表をお願いします。 鴨川地区の発表を始めます。 ⇒自助について ・自助とは、自分の命は自分で守るということです。 ・具体的には、災害時に自ら考え行動できる力を身につけること、日頃から災害に備えること。 ・自助するためには、「備える、考える、行動する」が必要になります。 ・鴨川地区は、お年寄りから幼い子まで広い年代の方が暮らしています。 ・海が近く、津波が来たらひとたまりもありません。なので自助は、非常に重要なものになります。 ・備える備蓄品については、水、食料、衣類、燃料です。また、重要となってくることは、日常でよく使う、水、缶詰、レトルト食品等は多めに購入し利用するたびに新しいものと入れ返ることです。 ・考えるとは避難場所を考えることです。 ⇒公助とは、市や県、消防の取り組みのこと。 ・ハザードマップには、地震、津波以外にも多くの情報が記載されています。 ⇒共助について ・共助とは自分たちの町は自分たちで守るということです。 ・具体的には、地域みんなで助け合うことです。 ・幼い子どもやお年寄りとコミュニケーションをとる必要があります。 ・地域の防災活動に参加することです。 ・近所の方と協力し初期活動や避難をすることです。 まとめ 国や県の取り組みを知ることも大事だが、実際に行動することが大事だということがわかりました。震災のことを調べて、想定よりも大きな規模を想定することができた。
司会 東条班	次に東条地区発表をお願いします。 ⇒私たちが考えた自助とは 災害時に自ら考え行動できることと日頃から災害に備えることです。 ⇒地域ごとの避難場所を発表



⇒自分の家から避難場所の移動時間を調べました。

- ・徒歩 3分51秒
- ・走り 1分6秒
- ・自転車 1分18秒
- ・車いす 1分58秒
- ・松葉づえ 3分58秒
- ・おんぶ 5分2秒



⇒年齢別にも避難方法を考えてみました。

0歳～2歳おんぶしてもらう（保育園を想定して）

4歳～12歳 走って逃げる（幼稚園、小学校を想定して）

⇒備蓄品のある場所も調べました

- ・東条小学校 ・鴨川中学校 ・亀田総合病院

⇒災害に備えるものとして準備したほうが良いものは

- ・水 ・衣類 ・長期保存が可能な食べ物 ・ガスコンロ

⇒市の災害対策

- ・防災メール ・海拔の看板 ・津波避難訓練

まとめ

災害のことを調べていくうちに地震や津波は改めて怖いものだと思います。

自分の身を守るためにも災害に備えることが大事だと思います。

自分を住んでいる地域を自分たちで守るためにも地域の方々と協力して守っていききたいと思います。

司会

次に田原地区発表をお願いします。

田原班

これから田原地区の防災対策について発表します。

⇒避難速度について

- ・走ることが1番早かった。
- ・おんぶが1番遅い。（走ると比較すると4倍時間がかかった）

結果走って避難することが1番良いことが分かった。

⇒田原地区の避難場所を紹介します

- ・西福寺 ・田原小学校 ・田原公民館 ・田原青年館 など

⇒起りうる災害を紹介します。

- ・地震 ・土砂崩れ ・地滑り ・洪水 ・火災 ・津波 など

⇒私たちが考える自助を発表します

- ・地滑りや土砂崩れが起きそうなところには近づかない。



- ・川に近づかない。
 - ・田原地区は避難訓練を定期的に行っているため積極的に参加する。
 - ・自分の命は自分で守る。
- ⇒共助について発表します。
- ・田原地区には高齢者が多い⇒避難場所への誘導が大切である
 - ・自分たちの町は自分たちで守りたい。
- ⇒公助について発表します。
- ・市や県、消防署などがやっている防災教育や避難訓練です。
- ⇒備蓄品について
- ・水や食料（缶詰）などを準備し使った時には新しいものと入れ替える。
- ⇒屋内でできる対策を紹介します。
- ・押し入れやクローゼットに集中的に収納し家具を減らす。
 - ・長時間いるスペースには背の高い家具を置かない。
- まとめ
- ・この学習を通して鴨川市でどの災害が起きたらどこに逃げればよいかわかりました。
 - ・細かい危険場所を理解できたので災害時には安全に避難したいです。
 - ・いろんな災害があることを知りどの災害にも対応していきたいです。
 - ・災害が起きた時に自分たちに何ができるかがわかりました。

司会

次に西条地区発表をお願いします。

西条班

西条地区の災害対策について発表を始めます。

⇒私たちが考えた自助

- ・自分の命を自分で守る

⇒地震対策について

- ・避難場所を確認しておく
- ・津波が来る危険がある場合⇒西条福祉センターに避難する。
- ・山間部では土砂崩れの危険があるため近づかない。

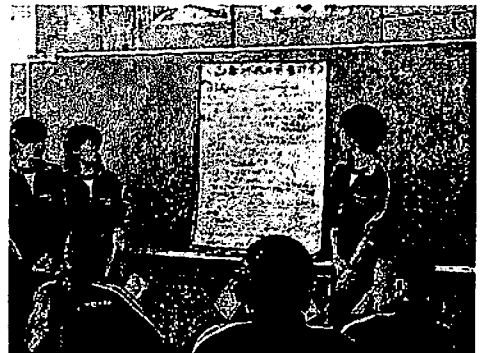
⇒備蓄品について

- ・水、食料、衣類、ガスコンロ、燃料など3日～7日分準備したほうが良い。

⇒公助について

- ・市や県が行っている防災訓練や災害対策のことです。
- ・耐震工事を進めている。

〈阪神淡路大震災では建物に押しつぶされて亡くなってしまった割合が8割を超



えています)

⇒共助について

- ・高齢者がたくさんいる地域なのでその人たちを助けるためにもまずは自分が助かること。
- ・地域の方と協力すること。
- ・高齢者の気持ちになって考えること。
- ・一番大切なことは、人を助けるという気持ちを持つこと。

まとめ

- ・この学習をとして、自助、公助、共助という言葉を知りました。
- ・自助ができないと共助ができないと思うのでこの学習を役立てていきたい。
- ・一番大切なのは自助だと思う。自分が助からないと周りの人を救えないから。

次に江見、太海、曾呂地区発表をお願いします。

司会
江見
太海
曾呂班

⇒避難場所を紹介します。

- ・太海公民館
- ・曾呂小学校
- ・城西国際大学
- ・江見小学校



⇒地区の特徴

- ・海に近い
- ・標高が高い
- ・避難場所が多い
- ・地滑り防止区域の範囲が広い
- ・家が密集している

⇒自助について

- ・自分の命は自分で守る
- ・災害時に自ら考え行動できる
- ・防災マップを使用し自分たちが住んでいる地域の地形について知る
- ・地域の防災訓練に参加する

- ・家屋の耐震化
- ・3日以上以上の食料、水、衣類の準備（備蓄品の整理をし循環備蓄品を整える）

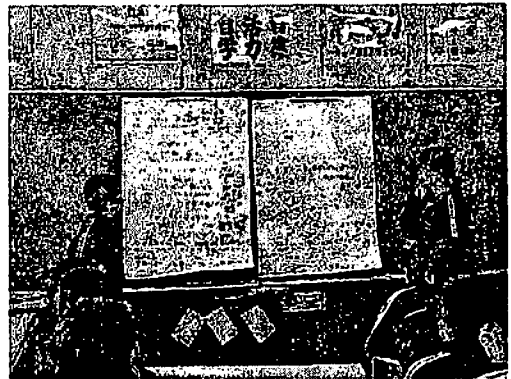
- ・家族での避難場の確認

⇒共助について

- ・自分たちの町は自分たちで守る
- ・地域の方たちと助け合う



	・地域の防災活動に参加する・災害時には地域の方と協力して救助活動を行う ⇒公助について ・市や県，消防署の取り組み・災害時の救助活動・公共施設の復旧 ・防災情報の伝達・防災教室の実施 まとめ ・高齢者体験を経験し，お年寄りの大変さを理解できたので災害時には，お年寄りや小さな子供たちに気を配り共に助けたいと思った。 ⇒そのためにまずは自分が助かることが大切で避難場所の確認をしておく
司会	次に天津，小湊地区発表をお願いします。
天津 小湊班	⇒地域の特徴 ・山や海が多く避難場所が密集している。 ・土砂崩れの可能性が高い地域。 ⇒自助について ・災害が起きた時に自分で考え行動できる。 ・地域の防災訓練に参加する。 ・廊下や扉付近に家具を置かない。 ・家具，家電の固定。 ⇒共助について ・災害時には地域の方々と協力したい。・地域の防災活動に参加する。 （自分たちの町は自分たちで守る） ⇒公助について ・高齢者体験を通してお年寄りの気持ちが考えられるようになった。 ・防災教育や市の避難訓練に積極的に参加したい。 まとめ これからの自分たちにできることを知り，まずは自分の身を守り地域の方々と協力をしてお年寄りや小さな子供たちを救えるようになりたい。
T	各班の発表ありがとうございました。 各班の発表の中に自助，共助，公助という言葉が出てきましたが，もし災害が起きた場合今回の学習を通して仲間から学んだこと，自分で調べて学んだこと，高齢者体験を通して学んだことを活かしていけたらと思います。では最後に，この学習の全体を通して自分に何ができるかを中心にワークシートに取り組んでもらいたいと思います。



V. 授業の実際

【第1～2時】 災害の発生原因や対策について調べよう。

単元の導入では、災害の発生原因や対策について調べ学習を行った。生徒たちから「災害」という言葉をキーワードにブレインストーミングを行い、列挙された災害について5班編制で1班は台風について、2班は地震について、3班は津波について、4班は火山について、5班は大気汚染についてそれぞれ調べ学習を行った。調べた内容をもとに各班の発表を行い、それぞれの災害の発生原因や対策を知る中で鴨川市に置き換えた場合、地形や地域環境をもとにすると「最も危険性の高い災害は津波であろう」という思考が生まれた。さらに生徒たちは海岸沿いにあり、低い土地である鴨川市では津波にどんな対策を取っているのか、また過去に「鴨川市に津波災害はあったのか」という興味・関心を持った。



【まとめ用紙】

【発表を聞く生徒】

【各班のまとめ発表】

《生徒の感想》

◎災害について各班が調べた内容の発表を聞きました。日本で起きている災害がたくさんあるということがわかりました。1番驚いたことは津波の威力です。海が深ければ深いほど速くなっていき、ジェット機くらいの速さになることを初めて知りました。津波で建物が壊され、多くの犠牲者をうみました。地震も上から物が落ちてきたり、身動きが取れないほどの揺れが起こったりすることがわかりました。自然の力の凄さが感じられました。海に近い鴨川に、もしこのような津波が襲ってきたら、時間内に避難場所に逃げられるかということが気になりました。

◎災害の多さに驚いた。各班の発表を聞き、原因や対策が理解できた。地震や津波に関しては、6年前に起きた東日本大震災のことを思い出した。この鴨川においても津波による被害は十分に起きる可能性があると感じる。そこで今現在、一番気になることが鴨川市の防災マップについてである。どれくらいの高さの津波を想定して作成されているのか、本当に安全なのであろうか、これから確かめてみたい。

◎いろいろな災害、その1つ1つがとても危険で怖いものであるということが分かった。自分が知らなかった災害の怖さを知ることができて、対策についても考えることができた。また今回の授業を通じて、もしもこのような災害が鴨川市で起こったらということを考えた。津波は鴨川市において最も起こる危険性の高い災害の1つであると思う。もっと詳しく調べてたくさんの人の命を救えることができる人になりたいと思った。

【第3時】 東日本大震災はどんな被害をもたらしたのだろう？

鴨川市において最も発生しやすいと考える自然災害が津波であろうという考えから津波に関して詳しく調べ学習を行った。最も記憶に新しく甚大な被害をもたらした東日本大震災での東北地方、陸前高田市の津波被害やその実際を追いかけた。生徒たちにとっても東日本大震災は小学校時代に経験しており、「震災地域ではどんな被害があったのか」を興味・関心を持ち調べ学習を行った。調べ学習を通じて、実際の被害の大きさや深刻さを知るとともに地域の防災マップにも触れることで「自分たちの地域における防災マップがどのようなものなのか」「本当に安全なのであろうか」という疑問を抱いた。

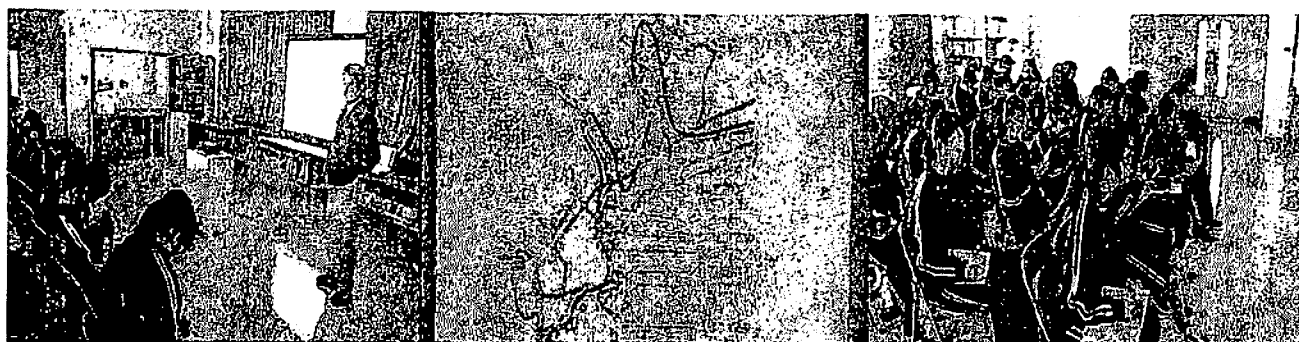
《生徒の感想》

- ◎東日本大震災の時の陸前高田市の津波被害の映像を見た。海からものすごい勢いで街に津波が向かってきて、あっという間に街全体を飲み込んでしまった。建物なども壊れ、逃げ回る人たちが映っていた。高台に避難していた人たちからは「早く逃げろ。波がくるぞ。」「大丈夫か。急げ。」などという声が上がっていて、実際の緊迫感が感じられた。
- ◎陸前高田市の防災マップを見た。震災時の津波被害の範囲はほぼ街全体を覆っていた。逃げられる場所はとにかく高台の山だけだった。陸前高田市の中心部も壊滅的な津波被害を受けていたことがわかった。鴨川市に同じような大きさの津波が襲ってきた場合には、鴨川市はどうなってしまうのだろうかと考えた。
- ◎防災マップを初めて実際に見た。陸前高田市の最新の防災マップには避難場所までの避難経路が記入されていた。また想定している津波の高さは、15mであった。震災前の防災マップと比較すると、東日本大震災を経て大きく改善されている点が見つかった。鴨川市の防災マップとはどんな違いがあるのだろうかと調べたくなった。

【第4～5時】 過去に鴨川市ではどんな災害による被害があったのだろうか？

鴨川市においては過去にどのような災害が起きていたのか。また津波による被害はあったのかという生徒の疑問を追いかけ、調べ学習を開始した。調べ学習によると鴨川市においても地震による被害や津波による被害が過去に発生していたということがわかった。中でも元禄時代に起きた「元禄地震による津波の被害は甚大」であり、「鴨川市にも大きな被害を与えた」という事実を掴んだ。すると生徒からは「今の中学校がある地域は、その時であつたら被害を受けているのだろうか。」「どれくらいの大きさの津波が襲ってきて、その当時の市民はどんな状況だったのだろう。」という更なる疑問が生まれた。そこで鴨川市郷土資料館へFWを行い、元禄地震の被害についてや当時の鴨川市の様子、現在と比較してその当時の市内への影響を詳しく調査した。

FWでは当時の鴨川市の地図や被害の実態を学習することができた。鴨川市において明応の大地震、慶長の津波、元禄の大地震、安政の津波と大きな被害をもたらした災害が多くあることを知った。元禄の大地震では津波被害も含めて145名が命を落とし、その内の7割が女性や子どもであったということ、更に元禄の大地震では余震が長い期間継続し、津波も3度到達していたということを知った。また地震のメカニズムや津波の特徴、今後の日本における津波の危険性や鴨川市における津波対策についても講話があり、事実の認識から避難において自分たちがどう行動するべきか、現在の鴨川市における対策の詳細を知ることの大切さを抱いた。



《生徒の感想》

◎FW を通じて、鴨川市には元禄地震の他にも多くの大きな地震があったということが分かり、もっと鴨川市の歴史が知りたくなりました。明応の地震、安政の津波などの地震や津波で亡くなった人々の為にも、この学習をこれからの生活に活かしていけるようにしなければと思いました。慶長の大大津波では、生き残った人が2～3人しかいなかったと聞いてとても驚きました。実際に鴨川市でもこのような災害が起きていたということは、私たちも自分の命は自分で守ることができるように、もっと詳しく知る必要があると感じました。

◎私は今回の FW まで元禄地震しか知らなかったが、初めて他にも鴨川市に被害をもたらした災害があるということを知りました。その当時の津波被害では現在の鴨川中学校付近まで浸水しているということにすごく驚きました。自分が今住んでいる地域も津波の被害を受けていたことが分かり、今後同じような津波が襲ってきたときに自分はどうすれば良いのだろうかと思いました。

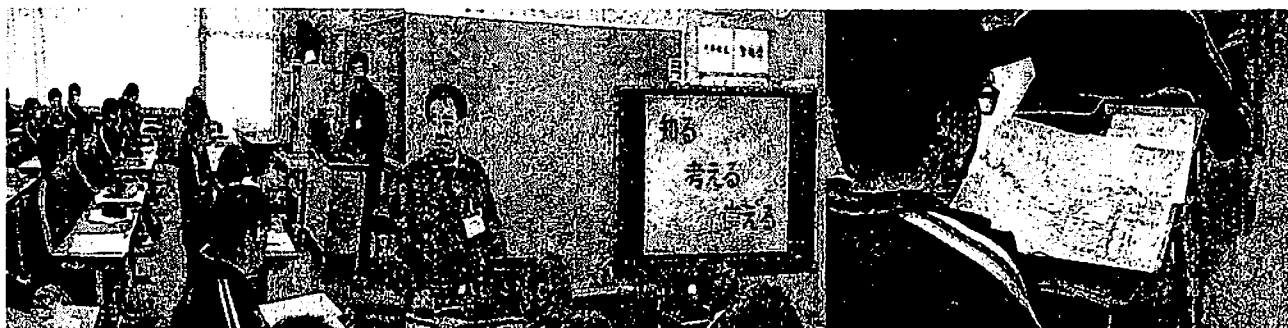
◎鴨川市には地震以外にもたくさんの災害による被害があったということを知りました。古い資料の中には、「地震が来たら津波も必ず来る」という昔の人々からの言い伝えも残されていた。今鴨川市で生活している私たちは、過去の災害を通じて、そこから学び、今後はどう活かして行くかが大切であると感じました。まず現在の鴨川市の防災マップや避難場所についてしっかりと知る必要があると思いました。

◎昔、この鴨川で起きた元禄地震や関東大震災について改めて知ることができました。昔の鴨川でも大地震や大津波が起こり、たくさんの死者が出たということを知り、災害に対して身近さを感じ怖くなりました。「もしも今日、大地震や大津波が起こったら・・・。」このことを考えながら聞いていました。「本当に東日本大震災の時のような大津波が来たら、鴨川中学校は大丈夫なのか？」その対処としての避難訓練が大切だと思いました。また自分が家にいた時に災害が起こったならば、自分自身にできることは何なのかを考えていかなければいけないと感じました。

【第6～7時】 現在の鴨川市ではどのような災害対策が考えられているのだろうか？

鴨川市郷土資料館へのFWを終え、過去に鴨川市に被害を及ぼした地震や津波が今起きたとしたらどのように避難するべきなのか、またどんな対策が必要なのか、現在の鴨川市においては災害に対してどのような対策がとられているのかについての興味・関心が強まった。そこで本時では、現在の鴨川市の災害対策について調査した。まず自分たちで鴨川市のHPを参考にして現在の鴨川市での災害対策について調べ学習を行った。そこで防災マップを実際に目にして、マップ上の情報を自分たちで読み取ることや備蓄食料の存在や避難場所の確認をすることができた。しかし、防災マップはどれくらいの津波を

想定して作成されているのか、また東日本大震災の時のように想定外の事態の場合にはどのような対応をするべきなのかという疑問点が生まれたため、鴨川市の防災対策課の方をGTとして招き、その疑問を解決することとした。



【消防防災課の方の講話】

【防災マップの見方を教わる】

生徒の感想

◎防災教室を行った。防災の大切さや現在の鴨川市で行われている災害対策を知ることができた。また防災マップの正しい読み取り方を教えてもらうことができた。あのマップには多くの情報が記載されていることがわかった。しかし、疑問に思ったことがある。海岸沿いにはホテルがあり、そのホテルが津波避難ビルに設定されているということが不思議だった。倒壊するという危険性は本当にはないのであろうか。また倒壊してしまった場合、そこに避難した人たちはどうになってしまうのだろうか。この防災マップは本当に安全なのであろうか。

◎防災マップには、5分間に移動できる距離や土砂崩れ危険区域が記載されていることに対して、それまで防災マップには津波の予想範囲しか書かれていないと勘違いしていました。現在の鴨川中学校には、10mの津波の場合、浸水予想範囲に入っていなかったので安心しました。しかし、15mや20m以上の津波が襲ってきた時に避難場所には10分以内で到着しないといけない。もしも遅れてしまったら・・・体の不自由な方や小さな子ども、高齢者の方はどうするのかと疑問が生まれました。

◎防災教室で鴨川市が地震や津波などの自然災害をどのように対策しているかがよくわかった。例えば山の方で放送が聞こえない人々のためにラジオを無償で配ることや市民の人々に災害の情報や危険箇所がわかるようになっている情報誌を渡しているなどの対策が取られていることを知りました。また防災マップの見方を教えていただき、10m以上の津波を鴨川市が予想していないのなら、もし10m以上の津波が来た時に私たちはどうすればいいのかと思い、不安になった。自分の家には祖父も一緒に住んでいるので、災害の時にどう対応するかを家族で考えなければいけないと感じた。

【第8時】 東日本大震災前後での防災マップにどのような変化が見られるだろうか？

前時のGTによる講話から「予想を超える被害が起きた場合への対応はどうすれば良いのだろうか」「現在の鴨川市の防災マップは本当に安全なのだろうか」という新たな疑問について東日本大震災の時の陸前高田市における震災前後の防災マップを比較することで、予想と実際を捉えることとした。すると震災前の予想浸水区域をはるかに超える被害が実際には及んでいたということがわかった。そして生徒たちは現在の鴨川市の防災マップの検証が必要であると強く感じた。

生徒の感想

◎陸前高田市の震災前と震災後の防災マップを比較したら震災前に予想されていた浸水区域をはるかに超えていたという事実がわかった。これが「想定外の事態」ということかと思った。実際に津波による被害を何度も受けてきた地域であっても予想していた以上の事態になってしまうとこれだけ大きな被害を生んでしまうんだと思った。震災後の防災マップは10m以上の津波を想定したものであり、避難経路までもが記載されていた。

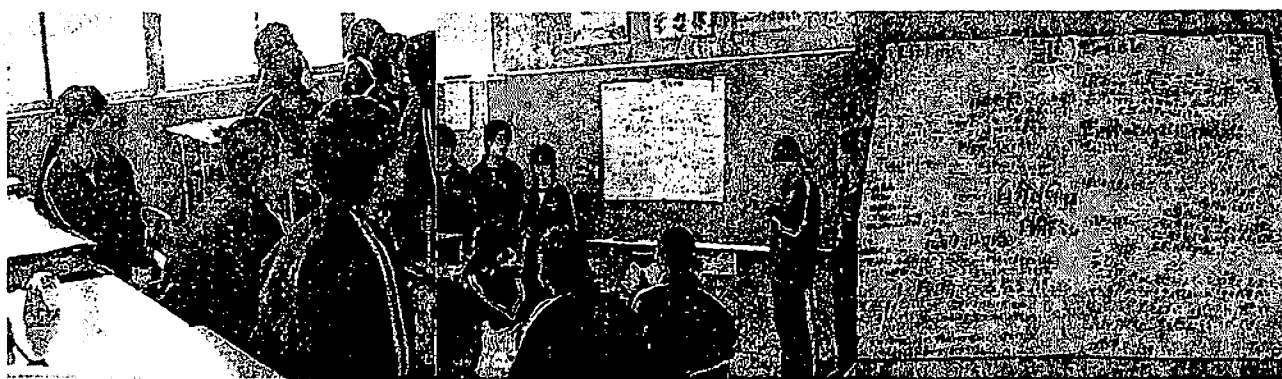
◎東日本大震災前後の防災マップを比較したら、予想をはるかに超える被害が実際にはあったということがわかった。鴨川市の防災マップにおいても同じことが言えると思う。今の鴨川市の防災マップは10mを想定で作成されているが想定する以上の津波が襲ってきた場合に人々はどう行動すれば良いのだろうか。この防災マップ通りに避難したら命を落とす危険性があると思った。またどの地域の防災マップも健常者を見立てて避難時間などが記載されているが、高齢者の方や体の不自由な方というのはもっと避難に時間を要すると思う。そういった人たちへの配慮はなくて良いのだろうか。

【第9時～11時】 鴨川中学校や地域での避難を考え、自分にできることは何だろう？

防災マップの検証により、鴨川中学校における避難経路や避難場所の検証を行う必要性を感じた。そこで現在、鴨川中学校で考えられている災害対策についての検証を行った。中学校は避難指定場所にも設定されている。津波の際には、第一次避難場所として3階とされている。また大津波警報の際には、近くの神社への避難が決められている。しかし3階への避難も階段があり、神社へは1.5キロもの道のりがあり所要時間は15分を要する。第6時～7時の学習を通じて防災マップは、健常者を考えて作成されているということを知ったため高齢者や車イス、自転車、走り、徒歩による避難時間の計測を行った。また高齢者や身体不自由者の移動の困難さを実感するために福祉体験を行った。それらを活かして地区別のまとめを行った。各地区には高齢者が多く居住する地区や保育施設があるため、子どもが多く居住する地区など特徴が見られる。それら地区の特徴を踏まえ、自分たちの地区での防災対策を考えるとともに自分たちにできることを考察した。



【福祉体験で高齢者や体の不自由な方の実体験をする生徒たち】



【地区ごとに身近な地域の防災についての発表を行う様子】

生徒の感想

- ◎より安全な避難先が分かったので、まずは自分の命をしっかりと守る。それから近くにいる人たちに声をかけや誘導をしていきたい。緊急事態では避難所でも自分のできることを率先して行っていきたい。
- ◎学校での津波想定避難訓練は、1500m先の避難先になっているが、同じ1500mなら、西条方面に避難する方が地形的にも坂がなく避難しやすいし、海から遠ざかるという点でも優れているのではないかとことを教頭先生に伝えようと思う。
- ◎自分たちの地区には保育園施設があるため子どもたちが多いと考えられる。その子どもたちが避難するということはとても大変なことだと思う。東日本大震災のように予想範囲を大きく越えるような災害時には、急遽の避難場所の変更等が考えられる。その時には、移動時間もかかるだろうし、何人もの子どもたちを一度に避難場所へ誘導するというのはすごく難しいことだと思うので、声かけや誘導を率先して行おうと思う。
- ◎私の家の周囲は高齢者が多く居住している。福祉体験を行ったことで高齢者の方々が体を動かすということがどれだけ大変なことなのかを感じることができた。その高齢者の方々の力になるためにも、まずは、自分の命をしっかりと守れるようにする。
- ◎今ある防災マップを自分たちで検証することはとても大切だと思った。防災マップの見方がわかるようになり、自宅が高台にあるので津波の心配がないかわりに、地滑りや土砂崩れの危険性があることがわかった。今までは読み取れなかった情報が読み取れるようになったので今後の生活に活かしていこうと思う。
- ◎防災マップの検証を通してわかったことは、車いすや自転車で避難するケースなど、様々な避難想定がされていなかったこと。避難方法別の距離を防災マップに書き込むことで、もっとたくさんの人にとって使いやすいものにすることができると今回の授業で学ぶことができた。今後、もっと情報を見やすいものにしていき、消防防災課の人に提案できるようにしていきたい。

参考文献・参考資料

- 文部科学省 『中学校学習指導要領 解説 社会編』
 文部科学省 『中学校学習指導要領 解説 総則編』
 文部科学省 『小学校学習指導要領 解説 社会編』
 藤井千春 『「問題解決的な学習」における「問題」とその「解決」についての検討』社会系教科教育学研究, 第7号, 1995年
 岩田一彦 『地域に教材を求める単元構成の条件』教育科学社会科教育, 1980年4月号
 『地震イツモノート』 ポプラ社 2010年
 『新冒険手帳 決定版』 主婦と生活社 2016年
 宝 馨 『自然災害と防災の辞典』 丸善出版 2011年
 岡田恒男 『地震防災の辞典』 朝倉書店 2000年
 宇治徳治 『地震学』 共立出版 2001年
 島村英紀 『ポケット図解 最新地震がよくわかる本』 秀和システム 2005年
 関根義彦 『天災・人災 海洋災害の分析と防災対策』 生物研究社 2006年
 村山貢司 『台風学入門』 山と溪谷社 2006年
 田結庄良昭 『南海トラフ地震・大規模災害に備える熊本地震から学ぶ』 自治体研究者 2016年
 井出哲 『絵でわかる地震の科学』 講談社 2017年
 伊藤和明 『日本の津波災害』 岩波書店 2011年
 赤塚雄三 『巨大津波災害から学ぶ』 鹿島出版会 2013年
 谷本雄治 『ぼくらの津波てんでんこ』 フレーベル館 2012年
 教育映像者 『震災の教訓を生かせー風化させない記録と記憶ー』 映学社 2014年
 畑中章宏 『津波と観音ー11の顔を持つ水辺の記念碑ー』 亜紀書房 2013年
 竹内吉平 『地震災害と防災活動ー震災消防活動とそのツール』 近代消防社 2013年

その他, インターネットによる調査で資料等を参考にしました。

取材協力 (順不同)

鴨川市郷土資料館 鴨川市役所消防防災課 鴨川市社会福祉協議会

研究組織

提案者	伊藤 圭吾 (鴨 川 中)	島津 裕司 (鋸 南 中)
研究員	安房社会科教育研究会 学習研究部 中学校社会科チーム	
部 長	川名 洋右 (安房東中)	副 部 長 長谷川 賢 (長 狭 中)
	小倉 智浩 (鴨 川 中)	渡辺 周作 (千 倉 中)
	白木 裕隆 (館山三中)	木下 郁 (富 浦 中)
	前田 大和 (嶺 南 中)	千葉 幸太 (館山二中)
	中西 あみ (富 山 中)	